



〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビルディング14F  
Tel 03-3263-8136 Fax 03-5214-6664  
Email info@tamt.or.jp

# TMAT

Non-Profit Organization

## News Digest

災害・国際医療協力隊  
ティーマット



# 被災地で医療支援活動に力

## 夜間当直や巡回診療など積極的

### 西日本豪雨

TMATは2018年7月、西日本を中心とした記録的な大雨により甚大な被害を受けた岡山県倉敷市に隊員を派遣、愛媛県と広島県でも調査活動を行った。倉敷市では先遣隊が9日に市保健所で医療ミーティングに参加、11日から約780人の被災者が避難している岡田小学校で本格的に診療を開始、夜間当直や巡回診療なども精力的に行い、昼夜を問わず医療活動に従事した。第1陣は12〜16日(一部は11日から)、第2陣は16〜20日に活動。

7月6日から7日にかけて西日本を襲った豪雨により、警察庁は19日、死者は14府県で223人と発表。総務省消防庁によると18日午後8時現在、16府県で約4700人が避難所生活を余儀なくされていた。

この未曾有の水害に対しTMATは9日、先遣隊として看護師2人を被害の大きい岡山県に派遣した。TMAT先遣隊は同日18時、倉敷市保健所で岡山日赤チーム、DMAT(国の災害派遣医療チーム)らとともに医療ミーティングに参加。



↑豪雨の影響で車は汚れゴミが散乱(倉敷市内)

害派遣医療チーム)らとともにに隊員募集を開始した。同日、先遣隊は避難所である倉敷市

被災者の避難生活は長期化が予想され、気温が高く避難所の環境も悪化していることから、継続的な医療的介入が必要との結論に達し、TMATなどの傘下に入った形での医療支援の要請が出た。これを受けTMATは本隊の派遣を決定した。TMAT事務局は10日に隊員募集を開始した。同日、先遣隊は避難所である倉敷市

被災者の避難生活は長期化が予想され、気温が高く避難所の環境も悪化していることから、継続的な医療的介入が必要との結論に達し、TMATなどの傘下に入った形での医療支援の要請が出た。これを受けTMATは本隊の派遣を決定した。TMAT事務局は10日に隊員募集を開始した。同日、先遣隊は避難所である倉敷市

船穂町の船穂小学校、倉敷市真備町の岡田小学校と蘭小学校を訪問調査。とくに真備町は地域の病院が機能していないため、避難者の持参薬切れなど問題が発生していたことが判明した。夜には医師1人、薬剤師1人が先遣隊に合流。

TMATの活動先は約780人の被災者が避難する岡田小学校に決定。当面は自宅に戻れない被災者ばかりだが、日中は自宅の片付けに行っている方も多く、昼夜の避難所人数に大きな開きがあった。診療は岡山日赤チームと一緒に対応。当初、診療終了は午後3時半頃を予定していたが、片付けから戻ってきた被災者に対応するため、TMATは午後6時過ぎまで診療を継続した。

また、避難所では岡山県薬剤師会のモバイルファーマシーを活用。これは調剤室など薬局機能を備えた機動力のある災害対策医薬品供給車両だ。TMATの薬剤師は県薬剤師会と連携し災害処方箋対応を実施

取材をした13日も例外ではなかった。TMAT隊員は倉敷市保健所で打ち合わせ後、避難所である岡田小学校に移動。そこでは体育館の他、各教室を避難所として開放していたが、教室にはエアコンの設置はなく、床にタオルなどを敷き扇風機の風を受けて眠っている方もいた。医療所では外での作業中に受傷した方や靴ずれを起こした方が多く、なかには軽度の熱中症で倒れた方、長引く避難所生活で不眠症状を訴える方も増えていた。また、長時間、同じ姿勢を取ったり、車中泊を余儀なくされたりする被災者には、血行の停滞を予防する弾性ストッキングを配布した。

同日、巡回診療も開始した。避難所を回って被災者の様子を観察し、医療ニーズがないか確認するの目的。TMATの高力俊策・湘南藤沢徳洲会病院(神奈川県)副院長は「避難所生活が長引くと、自覚がないまま体調を崩している方もおられます。潜在的な患者さんを見つけ出し、対応したり他のチームにつないだりすることで、少しでも安心で快適な生活を送っていただきたいと思います」と巡回診療の重要性を説く。

### 「災」に象徴された1年

TMAT理事長 福島安義



平素から格別のご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。皆様の温かいご支援のおかげで、TMATは14期目を迎えることができました。

2018年の漢字は「災」でした。これに象徴されるように、昨年1年は多くの災害を経験した年となりました。国内では大阪府北部地震(6月)を皮切りに、岡山県、広島県、愛媛県で甚大な被害が出た西日本豪雨災害(7月)、関西地区を中心に被害が出た台風21号(8月)、そして北海道全域が停電(ブラックアウト)となった北海道胆振東部地震(9月)。このうちTMATでは西日本豪雨災害と北海道胆振東部地震に隊員を派遣しました。

また海外に目を向けると、インドネシア・スラウェシ島で発生した地震と津波で2,000人を超える死者が出た大災害が発生(10月)、TMATとして2年ぶりの海外への災害派遣を行いました。さらには、ミャンマー西部の少数民族であるロヒンギャが大量難民化した問題に対し、バングラデシュのロヒンギャ難民キャンプで、TMAT初の難民医療支援(1月、11月)も実施しました。

このような多くの災害が起きた年は、18年が例外ではなく、今後、毎年起こり得るものだと考えておかなければなりません。TMATは、どんな時でも支援に駆け付ける覚悟でいます。そのためにも引き続き皆様のご支援、ご協力を賜りたく存じます。



↑多くの被災者が身を寄せる岡田小学校(避難所)体育館



↑岡田小学校でTMAT隊員が診療(13日)



↑巡回診療では潜在的な患者さんを見つけ出し対応(15日)

西日本豪雨支援活動の動き		
7月6日	21:00	西日本を中心とした記録的大雨の報道
7月7日	9:00	TMAT事務局で情報収集活動開始
7月8日	18:00	先遣隊として看護師2人を岡山県へ派遣決定
7月9日	8:00	徳洲会東京本部内にTMAT緊急災害対策本部設置
	11:00	宇和島徳洲会病院TMATメンバーが愛媛県宇和島市で医療ミーティング参加、避難所2カ所を訪問し医療ニーズがないことを確認
	14:00	福岡徳洲会病院DMATチームが広島県福山市の支援要請を受け医療ミーティング参加(翌日、医療ニーズがないことを確認)
7月9日	18:00	TMAT先遣隊が岡山県倉敷市で医療ミーティング参加、倉敷市の傘下に入り医療チーム本隊の派遣決定
	11:00	隊員募集開始
7月10日	13:00	先遣隊が倉敷市立船穂小学校、岡田小学校、蘭小学校を訪問調査
	16:00	医師1人、薬剤師1人を岡山県へ派遣決定、同日夜に先遣隊と合流
7月11日	11:30	岡田小学校避難所で診療開始
	17:30	合計26人を診療
7月12日	16:00	35人を診療。医師1人、看護師1人が避難所で当直
	18:00	医師1人、看護師2人、薬剤師1人、事務職員1人が合流
7月13日	19:00	68人を診療。看護師1人が避難所で当直
7月14日	18:30	53人を診療。看護師1人が避難所で当直。活動拠点を岡山市内から避難所近くの岡田幼稚園に移動
7月15日	17:00	66人を診療
7月16日	15:30	第2陣で医師2人、看護師4人、薬剤師1人、救急救命士1人が合流、引継ぎ後、第1陣の活動終了
	16:30	50人を診療
7月17日	16:00	45人を診療
7月18日	16:00	25人を診療
7月19日	16:00	30人を診療
7月20日	16:00	3人を診療、第2陣の活動終了



↑避難所の子どもたちと掲示板づくり(17日)

インドネシア・スラウェシ島地震

# 先遣隊派遣し情報収集

## 地元医師の診療介助も

TMATは2018年9月28日に発生したインドネシア・スラウェシ島地震（マグニチュード7.5）の被災地に先遣隊を派遣した。先遣隊第1班は10月1日に羽田空港を出発、現地の交通事情の悪化により移動が遅れ、4日に被害の大きかったパルに到着し活動を開始。現地ではNPO法人AMDA（岡山県）インドネシア支部の隊員と連携しながら災害医療活動を行った。6日夕方には先遣隊第2班が合流、10日まで活動した。



↑地元医師の処置の介助を行うTMAT隊員

TMAT事務局は30日、先遣隊として福岡徳洲会病院の坂元孝光・消化器内科医師、湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の佐藤哲也看護師、和泉市立総合医療センター（大阪府）の武智一将・事務職員の派遣を決めた。この時点で死者は800人を超える報道。

10月1日、先遣隊は羽田空港からインドネシアの首都ジャカルタを経由しマカッサルに着。翌日午前7時頃、在マカッサル領事事務所にて情報収集、搭乗予定の飛行機がキャンセルになったため、ムスリム大学チーム（UMIT）からの提案により、警察船でパルに向かうことになった。船上では同乗している政府関係者などからも情報収集した。

4日18時頃、先遣隊第1班を乗せた船はようやくパルに到着。すぐにインドネシア軍の移送でUndara病院に移動した。そこで岡山県を拠点とする医療支援団体のNPO法人AMDAインドネシア支部と面談。A

場合は衛星電話を使い、東京のTMAT事務局とは逐一連絡を取ることができた。船は大幅に遅れが出たが、安全性は確保されていた。被災地の状況確認ができていない現状を考慮し、TMAT事務局は追加派遣により十分な評価を行うことが必要と判断。先遣隊第2班として、湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の高力俊策副院長、札幌東徳洲会病院の合田祥悟・救急科医師、羽生総合病院（埼玉県）の奥野明看護師の派遣を決定した。

一方、1日にインドネシア政府が海外からの支援について受け入れを表明、支援申請の受け付けを開始したことを受け、TMAT事務局は2日に申請書を提出した。

同日では屋外の敷地にテントやベッドが置かれ、多くの患者さんが治療を受けていた。救急外来にも患者さんがごった返していた。先遣隊第1班は5日午前、同院救急外来で地元医師の診療介助を開始。午後

にはAMDAの医師とともに、津波の被害が大きかったDaria地区を視察した。この地域には、まだ多くの人が埋まっている可能性があるがあった。一方、先遣隊第2班は5日午前、マカッサルに到着。パル行き便の欠航を確認し、代替便の交渉を行ったが、同日の出発は難しく翌日の便を確保した。先遣隊第1班は、6日も午

前は救急外来と手術の介助を実施。この頃から徐々に医師を含めた医療従事者が充実し始め、支援物資や医療チームの出入りが多くなっていった。午後には周辺の病院を視察。多くの重症患者さんは大規模病院に搬送済みで、それ以外の患者さんもインドネシア国内支援チームの仮設診療所で過ごしている状況だった。ただし、物資が十分ではなかったため、視察時に物資を送り届けた。夕方には先遣隊第2班が合流した。

7日、先遣隊第1班が帰国。第2班は引き続き午前には救急外来と手術の介助、午後は視察を実施、インドネシア国内支援チームの仮設診療所などを訪れた。国内から多くの医療チームが入り、アプローチできていない地域に巡回診療も開始して



↑警察船の船内でUMITメンバーと一緒に



↑巡回診療で骨折疑いの患者さんを搬送



↑現地ではAMDAチームと合同で活動

### 北海道胆振 東部地震

## TMAT先遣隊が 現地調査 徳洲会関連施設で 停電が発生

2018年9月6日午前3時8分頃、北海道胆振地方を震源とする地震があり、震度7を観測。厚生労働省は同日午後1時現在、道内の249病院が停電、47病院が断水したと発表した。

道内にある徳洲会6病院も、すべて地震直後に停電したが、札幌徳洲会病院は夕方、日高徳洲会病院、共愛会病院、帯広徳洲会病院は7日午前中に復旧した。また、すべての病院で断水はなかった（札幌南徳

州会病院は受水槽で対応）。6病院とも自家発電機で対応し入院患者さんに影響はなかったが、札幌病院と札幌東徳洲会病院では受け入れ体制強化のため、退院・転院可能な患者さんは退院・転院を実施。外来はトリアージ（緊急度・重症度判別）による受け入れ制限を行い対応した。

同日の朝食は、ガスの供給がある病院では通常食で対応、一時ガスの供給が停止した病院では非常食を使用した。どの病

**死者は2,081人超**

マレーシア  
ジャカルタ  
スラウェシ島  
震源  
パル

インドネシア

2018年9月28日、現地時間午後6時2分頃（日本時間午後7時2分頃）にインドネシア・スラウェシ島スラウェシ州パルの北78kmを震央として、マグニチュード7.5の地震が発生した。世界でも例のない、液状化現象による大規模な被害が起こり、地すべりによると見られる津波も発生。それにとまなう影響で、同地域は甚大な被害を受けた。

インドネシア国家防災庁は10月26日時点で、死者数を2,081人、特定できた行方不明者を1,309人と発表した。

↑被害の大きいDarria地区の様子



↑手術の介助にも積極的に参加

手術の介助にも積極的に参加

札幌市でも道路が地割れするなど被害



↑札幌市でも道路が地割れするなど被害



↑安平町役場で情報収集するTMAT先遣隊隊員

午後には札幌市の3病院を訪問し被害状況を確認。通常の医療機能を取り戻しつつあったため、先遣隊は活動を終えた。



# 実技訓練など実施

## 災害救護・国際協力ベーシックコース

TMATは2日間、古河総合病院(茨城県)で「第46回災害救護・国際協力ベーシックコース」を開催した。2017年6月に中部徳洲会病院(沖縄県)で行って以来、約一年半ぶりの開催。西日本豪雨や北海道胆振東部地震、インドネシア・スラウェシ島地震など近年、国内外で大規模災害が相次ぎ、災害に対する意識が高まるなか、徳洲会グループ内外から計24人が参加した。

## 災害救護・国際協力ベーシックコースは、TMATが2007年に

創設した教育プログラム。災害発生時の救援隊派遣の決定、現地での救護活動、活動終了までの流れを座学やグループワーク、実技訓練などを交えて学ぶ。これまで主に全国の徳洲会グループ病院で開催し、これまで徳洲会グループ内外の医療従事者を中心に1000人以上が受講している。TMAT隊員として海外の被災地に赴く場合、同コースを修了していなければならない。

今回も医師をはじめ看護師や薬剤師、臨床検査技師、理学療法士、管理栄養士など多職種が参加。関東だけでなく、北海道からの受講者も見られた。コースディレクターは橋爪慶人TMAT理事(東大阪徳洲会病院院長)、コースリーダーは高力俊策・湘南藤沢徳洲会病院(神奈川県)副院長、チューターは當麻俊彦・八尾徳洲会総合病院(大阪府)整形外科部長、坂元孝光・福岡徳洲会病消化器内科医師、柳澤修平・四街道徳洲会病院(千葉県)看護師、浅野昌子・成田富里徳洲会病院(同)看護師、西村俊謙・長崎北徳洲会病院看護師が務めた。

## 都内在住の男性1000万円を寄付

TMATは2018年4月、東京都武蔵村山市在住の山田晃三さんから1,000万円の寄付金を受けた。同市に近い東京西徳洲会病院に山田さんを招き、寄付金の贈呈式を開催。TMATの福島安義理事長(一般社団法人徳洲会副理事長)が謝意を伝えるとともに、感謝状を贈った。

山田さんは80歳代で、徳洲会との関係は古く、かつて東京西病院の開院に協力。また、現役引退後に趣味でもある海外旅行中にけがをし、帰国後に湘南鎌倉総合病院(神奈川県)に入院。状態安定後、東京西病院で療養したことがある。

挨拶のなかで山田さんは、自身の紹介や徳洲会との関係を説明。「徳洲会に本当にお世話になりました」と謝意を示し、その思いから徳洲会の職員が数多く隊員として登録しているTMATに寄付したことを明かした。山田さんは列席者に「災害支援や途上国支援に役立ててください」と願いを託した。



山田さん(前列中央)を囲み記念撮影(同右から4人目が福島理事長)

## GEヘルスケア・ジャパン ポータブルエコー1台寄贈

TMATは今年2月8日、GEヘルスケア・ジャパンからポータブルエコー1台が寄贈された。これまでのTMATの活動が評価され、今回の寄贈が実現。同社内で行った寄贈式には福島安義理事長が出席した。

寄贈式で同社の多田荘一郎・社長兼CEOは「この製品は世界中で使われていますが、その3分の1ほどが日本で使われています。主な目的は在宅医療や災害医療ですが、使用されるなかで機能も進化し続けてきました」と製品について説明。

TMATの活動にも触れ、「災害医療の現場では、妊婦さんの健康管理や腹痛の患者さんなど多くのシーンで使用できると思います。今後とも役立てていただけたら幸いです」とメッセージを送った。



これに対し福島理事長は「災害がないことが一番ですが、有事の場合は積極的に使わせていただきます」と意気込みを見せた。

連携を誓い合う福島理事長(右)と多田社長

初日は災害医療総論、通信機器、巡回診療、トリアージ(緊急性・重症度選別)、感染症・予防接種、病院防災をテーマとした講義を実施。災害のタイプや災害発生後の対応の優先順位、通信機器の種類と特性、安

全管理のうえで注意すべき感染症と予防接種、巡回診療やトリアージの方法、病院防災のあり方などについて、それぞれ講師が解説した。

2日目は被災地での連携組織をテーマとする講義でスタート。被災地で支援活動を展開するために現地の政府や海外のNGO(非政府組織)、他国の医療支援チームなどと協力する重要性を学んだ。特殊災害の講義後、テストを実施。浦部優子医師が同コース史上初の満点回答者となり、会場が沸く場面も見られた。

## 大規模地震時 医療活動訓練 周産期避難所を担当

海トラフ地震を想定した内閣府主催の訓練である「平成30年度大規模地震時医療活動訓練」が2018年8月4日開催され、TMATが参加。同訓練は南海トラフ地震を想定した医療活動に関するもので、今回は九州、四国を舞台とした全国規模の訓練を行った。

TMATが参加した宮崎県の会場では、同訓練で初めて避難所を想定し実施。宮崎大学医学部看護学科地域・精神看護学講座精神看護学領域の原田奈穂子教授が中心となって企画した。同県内の中学校を会場に、医療や衣食住に関わる団体が参加した。

これまでの災害急性期の医療体制に関する訓練が中心だった

野口幸洋TMAT事務局員は「15年に鬼怒川が決壊し被害が出た茨城県常総市の先遣活動(調査)に、古河病院に協力していただいた背景もあり、今回同院で開催できた意義を感じています。今後もトレーニングできる場を設けたいです」。

古河病院の福江眞隆院長は「職員に伝えるためにも自分が知らなければと考え参加しました。トリアージの実技訓練は緊張感もあり、非常に勉強になりました」と振り返り、「自院の災害対策でも生かしたい」と意欲を見せた。

古河病院の福江眞隆院長は「職員に伝えるためにも自分が知らなければと考え参加しました。トリアージの実技訓練は緊張感もあり、非常に勉強になりました」と振り返り、「自院の災害対策でも生かしたい」と意欲を見せた。

野口幸洋TMAT事務局員は「15年に鬼怒川が決壊し被害が出た茨城県常総市の先遣活動(調査)に、古河病院に協力していただいた背景もあり、今回同院で開催できた意義を感じています。今後もトレーニングできる場を設けたいです」。

あるため、訓練への参加要請があった。同訓練の運営責任者である原田教授が11年の東日本大震災の際、TMATの一員として宮城県気仙沼市で活動したことも、TMATの訓練参加につながった。

訓練でTMATは校舎内に構えた「周産期避難所」の設置・運営を担当。これは、妊婦さんや小さな子どもを抱えた避難住民が安心して生活できるように配慮した避難所。生活スペースや診察スペース、プライバシーに配慮した簡易入浴、おむつ交換スペースなどを設けている。

TMATは過去の国内災害では避難所を中心に活動を実施。また、16年の熊本地震では、避難所の医療支援に加え、高齢の方や妊婦さん、乳幼児への対応に取り組んできた経験が

訓練に参加した学生や住民の方からは「避難所に、このようなスペースがあるのは驚いた。妊婦や乳幼児が安心して避難できる環境の重要性を感じた」との声が聞かれた。

訓練に参加した学生や住民の方からは「避難所に、このようなスペースがあるのは驚いた。妊婦や乳幼児が安心して避難できる環境の重要性を感じた」との声が聞かれた。

訓練に参加した学生や住民の方からは「避難所に、このようなスペースがあるのは驚いた。妊婦や乳幼児が安心して避難できる環境の重要性を感じた」との声が聞かれた。



災害現場での衣食住などテーマにグループワーク



記者会見訓練で答える高橋暁行・古河病院副院長(右から2人目)

べきことにも言及し、①体調管理(2〜3週間)、②PTSD(心的外傷後ストレス)への注意、③所属部署などへのお礼と報告、④活動報告書や記録(写真)の提出、⑤学会などでの発表などを挙げた。

参加者の上古原良実・復興庁男女共同参画班政策調査官(小児救急看護認定看護師)は「16年の熊本地震でTMAT隊員として活動し、今後は海外支援も行いたかったので受講しました」と説明。

古河病院の福江眞隆院長は「職員に伝えるためにも自分が知らなければと考え参加しました。トリアージの実技訓練は緊張感もあり、非常に勉強になりました」と振り返り、「自院の災害対策でも生かしたい」と意欲を見せた。

野口幸洋TMAT事務局員は「15年に鬼怒川が決壊し被害が出た茨城県常総市の先遣活動(調査)に、古河病院に協力していただいた背景もあり、今回同院で開催できた意義を感じています。今後もトレーニングできる場を設けたいです」。

Medical Assistance Team TMAT Non-Profit Organization

QRコードを読み取ってアクセス!

ホームページで情報発信

http://www.tmat.or.jp

TMATはホームページを通じて積極的に情報発信に努めている。活動内容や活動指針、代表挨拶、定款など基本情報に加え、「NEWS・お知らせ」として、豊富な写真とともに国内外での活動の様相を紹介。TMATが主催する研修会(災害救護・国際協力ベーシックコース、国内災害医療支援トレーニングコース)の告知なども行っている。

また、2006年6月に発行したTMATニュースについては、第1号からすべてのバックナンバーをPDFで公開。さらに、TMATへの入会案内、募金方法、研修会のプログラムなどの紹介など盛りだくさんのコンテンツだ。TMATのFacebookへのリンクも貼っている。

TMATホームページのトップ画面



# ロヒンギヤ難民に医療支援

## ポータブルエコーなど持参し診療

TMATは2018年11月23日から1週間、ミャンマーの少数民族イスラム教徒であるロヒンギヤ難民に医療支援を行うため、バングラデシュの難民キャンプにTMAT隊員の医師2人を派遣した。今回は現地での医療支援活動を行っているNPO法人AMDA(岡山県)バングラデシュ支部に協力する形で支援、同支部が仮設診療所を開設しているクトウパロンというエリアで活動した。隊員は湘南鎌倉総合病院(神奈川県)の河内順・副院長兼主任外科部長と福岡徳洲会病院の鈴木裕之・救急科医師。TMATとして初めて難民への医療支援に取り組んだ。バングラデシュでの活動自体もTMATとして初。

### AMDAと協力して実施

ロヒンギヤはミャンマー西部のラカイン州を根拠地とする少数民族派イスラム教徒。同国の多数派である仏教徒から、歴史的な背景などにより迫害を受け、隣国のバングラデシュに流入、同国南部のコックスバザール県にある難民キャンプで生活している。

ロヒンギヤの難民問題は1990年代からあり、当時から数万人規模の難民キャンプが同県につくられていた。徐々に増加し、約20万の難民が存在していたが、17年8月にラカイン州で大規模な衝突があり、大量の難民が発生。推計約100万人に上るとも言われている。

2日間の移動を経て、25日から医療支援をスタート。AMDA Bangladeshの仮設診療所は、

患者さんの多くは女性と子どもで、外傷はほとんどなく、感冒症状や発熱、消化器症状、

皮膚症状がメイン。なかには結核や赤痢など感染症もあった。診療には「言葉の壁」が立ちふさがった。TMAT隊員の英語を現地スタッフがベンガル語に翻訳、それをさらにロヒンギヤ難民のボランティアがロヒンギヤの言葉に翻訳する段階を踏まなくてはならず、手間や時間を要するため、ジェスチャーなどを駆使してコミュニケーションを取る必要があった。



↑TMAT隊員の河内副院長(右から2人目)と鈴木医師(その左)

難民の住居が建ち並ぶ沿道の一角にある。診療は午前10時から午後2時までで、1日の患者数は120人ほど。TMATとAMDAの医師が協力して診療にあたった。

18年1月に現地の医療ニーズを調査

難民キャンプでの医療支援活動の実施に先立ち、TMATはAMDAの協力の下、18年1月中旬から約1週間、現地調査を実施した。国際医療協力の一環として隊員派遣の可否を検討するため、現地の医療ニーズや治安・生活環境、TMATとしてどのような役割を果たせるかを調べた。この時、TMATからバングラデシュを訪問したのは、野口幸洋TMAT事務局員兼ロジスティクス統括(一般社

現地調査実施の発端は17年10月にさかのぼる。菅波代表とTMATの福島安義理事長が、国内外の災害医療に関する連携について意見交換をするために面談。その際、菅波代表から

「17年8月の大規模な衝突後、TMATとしてできることがあるか模索していました。ただし災害医療支援と異なり、赤十字などを除くバングラデシュ国外の団体が、同国政府から許可を得て活動するのはハードルが高く、また急性期医療よりも、難民キャンプ生活のなかでの内科的な医療提供や支援活動の長期化など、TMAT単独での



バングラデシュ周辺地図



↑日本から持参したポータブルエコーで腹部診察



↑コックスバザール県のクトウパロンにあるロヒンギヤ難民キャンプ

### TMATは皆様からのご支援のもとに 精力的に活動しています ご協力をお願いいたします

1995年の阪神・淡路大震災での活動を契機にスタートしたTMATは、世界の人々の生命と健康を守るため、災害医療支援をはじめ総合的な医療支援活動を各国政府やNGO(非政府組織)、地域団体と協力しながら活動しているNPO団体です。私たちの活動は、主に企業・団体・個人の皆様からTMATの会員として資金協力していただくことで支えられています。ぜひ、ご協力ください。

- 正会員年会費..... 10,000円
- 個人賛助会員年会費..... 1口3,000円(1口以上)
- 団体年会費..... 1口30,000円(1口以上)

#### 振り込みによるご協力

- 郵便口座記号番号: 00170-4-564249
- 銀行名: ゆうちょ銀行
- 金融機関コード: 9900
- 店番: 019
- 預金種目: 当座
- 支店名: 〇一九(ゼロイチキュー)店
- 口座番号: 0564249
- 受取人: 特定非営利活動法人TMAT

#### クレジットカードによるご協力

http://www.tmat.or.jp/donate\_on\_the\_credit/  
 ※VISA/MASTER/JCB/AMEX/DINERSの各種カードがご利用いただけます  
 ※提携カードでは、お取り扱いできない場合があります



↑現地調査のため難民キャンプを訪れた(右から)野口・事務局員、菅波代表、山本教授とAMDA Bangladeshスタッフ

この時点で決まっていたことから、TMATも同行し調査を行うことになった。

「17年8月の大規模な衝突後、TMATとしてできることがあるか模索していました。ただし災害医療支援と異なり、赤十字などを除くバングラデシュ国外の団体が、同国政府から許可を得て活動するのはハードルが高く、また急性期医療よりも、難民キャンプ生活のなかでの内科的な医療提供や支援活動の長期化など、TMAT単独での



↑AMDA Bangladeshの仮設診療所



↑小児の診療を行うAMDA Bangladeshの地元医師